

祖先の祭り（お盆）

「お盆」という言葉は、盂蘭盆会（梵語（サンスクリット語）のウラバーナの音訳）の略とされていますが、行事の際、供え物を載せる平らな器をお盆といったことから、この行事をお盆というようになったとの説もあります。

お盆は一般的に祖先の御霊が故郷の家に帰ってくると考えられています。仏教固有の伝統行事のように思われがちですが、実はそうではありません。基本的に仏教では、死者は死後四十九日が経つと地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間界、天界の六道いずれかに転生すると言われています（六道輪廻）。そして赴いたそれぞれの世界で修行を積み、あるいは罰を受けた後、再び生まれ変わるといふ輪廻転生の思想があります。このようなことから亡くなった人間が転生することもなく、解脱を達成し輪廻転生の循環から逃れたわけでもなく、御霊のまま毎年実家に戻ってくるということなどは、仏教の思想からすると有り得ないはずです。故に、お盆（死者の里帰り）は仏教の思想とは異なったものであると理解出来ます。

神道に於いては「お盆」と言う言葉は使いませんが、七月もしくは月遅れの八月十三日の晩には、迎え火を焚き、十五日もしくは十六日には送り火を焚いて家には提灯を燈し亡くなった方の好物などを御霊にお供えます。そして、このような祖先を祭る習慣は、古くから伝わる日本固有の行事です。その日本固有の行事と、仏教でいう先祖供養の行事が一緒になり、後にお盆として習俗化されました。いずれにせよ祖先の祭りは日本人にとって大変重要視されています。

それでは、何故古来より日本人は祖先の祭りを大切にしてきたのでしょうか。江戸時代の伊勢・豊受大神宮祠宮の中西直方は『死道百首』の中で、「日の本に生まれ出し益人は神より出て神に入るなり」と詠んでいます。この歌には、祖先の神から命を受けた者は、やがて祖先の神の許へ帰っていくという日本人の死生観がよく表されています。

また神道では、死後に御霊はどこへ行くのかという問題について、古典では「高天原」「日之若宮」「常世」「綿津見神の宮」「黄泉」「底津根国」「妣の国」等々と様々な他界が語られています。ただ、これらがいったい何処に存在するのかは確定的ではありません。しかし日本人が伝統的に考えてきた他界は私たちの生活と繋がっており、それが民間信仰では子孫達の生活が見える小高い山の上や、あるいは少し沖合の島などに仮託されています。つまり、生者のごく身近なところにある世界だと考えられています。

私たち日本人の御霊は、仏教（『阿弥陀経』）でいうような十萬億土の彼方に行くのではなく、我が家、我が郷土、我が国に留まって、祖神と共に子孫の繁栄を見守り、また子孫からのお祭りを受けることでその力を発揮されるのです。

【参考資料】

神道事典 國學院大學日本文化研究所

「日本人のしきたり」飯倉晴武 青春出版社

加藤隆久編 神葬祭大事典 戎光祥出版